雨あがる　山本周五郎

こういうところへあの女が帰って来た。いつもは夜半過ぎになるのに、客が取れなかったものかどうか、蒼ざめたような尖った顔で土間へ入って来て、このありさまを見るとあっけにとられ、濡れた髪を拭こうとした手をそのまま、棒立ちになった。これを初めにみつけたのは源さんの女房である。子供がたびたび飴玉などを貰うので、なかでは女と親しくしていたが、そのときは酔って、昼間の出来事をつい忘れたとみえ、「おやおろくさんの姐さんお帰んなさい、いま三沢さんの旦那のおふるまいでこのとおりなんですよ、さあ姐さんも早くあがって」

こう云いかけたとき、説教節の爺さんがとびあがって叫んだ。

「おう帰ったな夜鷹あま、あがって来い、飯を返してやるから此処へ来やあがれ」

中風ぎみで多少は舌がもつれるけれど、その声はすばらしく高く、眼はぎらぎらしていたし、躯ぜんたいが震えた。みんなは黙った。唄も三味線もぴたりと止めて、一斉に女のほうへ振向いた。

「人を盗人だなんてぬかしゃがって」爺さんは死にそうな声で続けた、「――てめえはなに様だ、よくもこの年寄のことを、さあ来やがれ、おらこのとおり食わずに取って置いたんだ、ざまあみやがれ、持ってけつかれ」

「まあ待って下さい、そう云わないで、まあとにかく」伊兵衛が立って爺さんをなだめた、「人には間違いということがありますからね、あの人も悲しいんですよ、人間はみんなお互いに悲しいんですから、もう勘弁して仲直りをしましょう」

彼はしどろもどろなことを云って、土間にいる女のほうへ呼びかけた。

「――貴女もどうぞ、なんでもないんですから、どうぞこっちへ来て坐って下さい、なにも

有りませんけれど、みなさんと気持よくひと口やって下さい、すべてお互いなんですから」

「おいでなさいよ」

宿の主婦も口を添えた。

「――旦那がああ仰しゃるんだから、此処へ来て御馳走におなんなさいな」

続いてみんながすすめた。酒のきげんばかりでなく、この人たちは喜びや楽しみを独占することができないのである。タガ直しの源さんの女房が立ってゆき、手を取って女をつれて来た。彼女はつんとすました顔で坐り、義理で飲んでやるんだというふうに、黙って反りかえって盃を取った。

「さあ賑やかにやりましょう」伊兵衛は大きな声で云った、「――天が吃驚してこの雨をしまいこむように、さあひとつ、みんなで……」

そしてまた騒ぎが始まると、伊兵衛はようやく勇気が出たようすで、自分の前にある膳を

第 19 回　青空文庫朗読コンテスト　課題
山本周五郎・作「雨あがる」より抜粋 B

持って立ち、妻のいる三帖へ入っていった。